

2023年12月22日

筆記 岡部昌平

第340回山口西田読書会（2023年12月9日）の Protokol

【テキスト】

岩波書店『西田幾多郎全集』（旧版）第四巻「場所」の「五」第3段落、282頁の2行目「判断は自己同一なるものに至ってその極限に達する」から282頁の14行目「判断的意識の面からその背後に於ける意思面に於ける自己同一なるものを見た時、それは個体となるのである」まで。

【キーワード】

述語面に於ける自己同一が即ち我々の意志我の自己同一である（282ページ、11行目）

【問】

未知の個物に対する意志（好奇心、探求心）はどのように生じるのか。

対象が未知の物であるとき述語面は乏しく意志が起こりにくいように思えるが、未知の物に対する好奇心、探求心は自己同一でどのように説明できるか。また既知であっても対象が山、海、風、雲、空のような場合、それほど豊富な述語面を持っているとは思えないがどうか。にもかかわらず、わたしたちは易々と輪郭線を越えてはいないか。

述語面は「主語面を越えて深く広くな」（281.15）るとされるが、それは対象に応じて違ってくるのか、対象が何であっても深く広くなるのか。テキストは後者のように思えるが、深まり広がる述語面のありさまをもうすこし議論してみたい。